

# 限りなく上昇する探求

The Never-Ending Upward Quest



Copyright © 1998-2006 EnlightenNext, Inc. All rights reserved.

“スパイラルダイナミクス 限りなく上昇する探求” 序文



ジェシカ・レーミシエ  
what is Enlightenment? 編集者  
聞き手 / ナレーション

この三ヶ月間スパイラルダイナミクス(人間発達についての深い洞察を示す理論)に取り組んだことで、私は、人を「色」として理解するようになってきました。私たちの存在に関わる複雑な状況、その全体像を操作可能なかたちで理解する際、誇張でも何でもなく、スパイラルダイナミクスは、一つの大きなブレイクスルーであると言えます。この理論によって、そういった複雑な状況、すなわち、多様に錯綜する世界観や信仰やアイデンティティーといったものが、個人のレベルおよび文化全体のレベルの双方において、適用可能な8つのミーム・価値システムとして表されるわけです。次第に分かってきたことですが、人間の意識についてのこのダイナミックな螺旋形モデル自体、色分けされたミームの階層として、文字通り、私の世界認識そのものを「色分け」してくれるのです。

友人の結婚式に参加したときのことで。不意に自分が次のように人を見ていることに気づきました。十字架をもち質素な身なりをした女性は、ブルー(絶対主義者)のミーム、ローレックスを身につけたやり手の若者は、オレンジ(成功崇拜者)のミーム、長い髭を生やしたヒッピー風の人物は、グリーン(平等主義者)のミーム。そればかりでなく、共同体的生活や受容に憧れ、商業主義的会社形態や政治的保守に対しては偏見を持ち、環境問題等に強い関心を抱く自分自身を振り返りながら、いかに自分がグリーンであるかについても気づかされました。むろん、他方では、アウディーを自家用車にして(オレンジ)、道路を突っ走る(レッドの衝動)のも自分であることは確かです。



では、次のような見方については心配すべきでしょうか。私は、「ミーム」という大雑把に色分けされた「性格判断」によって、単に他者と自分自身を適当に分類しているだけなのでしょう。ミームで構成されたスパイラルダイナミクスのモデルは、人間の複雑さ・多様さへの真摯な対峙を忘れさせ、そのような対峙でこそ明らかになる「自分は誰であるのか」といった(根本的な)問いをも忘れさせるような単に浅薄な方法に過ぎないのでしょうか。私の見解としては、スパイラルダイナミクスは、そのような冷たい分析的無関心や一面性とは反対に、むしろ(私自身を

含めた)人間の心理や信仰や価値観といった広範囲の様相(これらが無意識的にも私たちの選択を左右し、アイデンティティーを形成するわけですが)に対して、深くかつ明快な洞察をもたらすものだと思います。また、スパイラルダイナミクスは、意外にも私たちを自由にしてくれる客観性をも備えています。個人的な経験を、人間心理発達の歴史全体という文脈の中に位置づけてくれるからです。その歴史全体は、原始的・生存主義的・本能(ベージュ)から始まり、最終的には霊的希求(ターコイズ)へ至る進化として——私の場合、環境平等主義(グリーン)が「投与」されているわけですが——私たちの中に存在しているものなのです。

ただ、「なぜスパイラルなのか」という疑問が生じるかもしれません。スパイラル(螺旋)は、自然界の動きであり、陰陽であり、DNAから銀河系まで全てにおいて明らかに存在する普遍的なフラクタルであるからです。スパイラルダイナミクスは、人間の意識の進化が次のように表されるのが最適であるという立場をとるわけです。すなわち、徐々に複雑化のレベルを増していきながら発展していくのが人間の思考体系であり、それを図示するのが上向きの螺旋形状であるということです。たしかに、めまぐるしく行きかう現代世界を見るまでもなく、人間の意識は、数千年単位で劇的にその複雑性を増してはいます。一見、テクノロジーの恩恵に溢れたポストモダンな生活という私をとりまく環境は、スパイラルをかなり上昇しているだろうという幻想を抱かせます。しかしながら、スパイラルダイナミクス理論によると、私たち人類は、単にその歴史の最初の大きなコマから飛び出そうとしているにすぎないのだそうです。その最初のコマとは、根本的には「生存主義」と定義される十万年単位のものであり、スパイラルダイナミクスでは「ファースティアー(第一層)」と呼ばれます。

ドン・ベック博士は、ほぼ 30 年近くにも渡り、スパイラルダイナミクス理論の発展・普及・実践に取り組んでいます。その実に包含的かつ統合的(インテグラル)な視点(これがスパイラルダイナミクスのエッセンスでもあるわけですが)を示しながら、注意深い熟考を加えながらも、誰もが自分の家族の事柄を語るような手軽さで、地球上のあらゆる文化を含む広大なタペストリーを描き出そうとしています。このような発展的人道主義の立場から、「スパイラルダイナミクス理論が、人類の歴史において私たちが直面する重大な問題や責任に対応し得るものである」というベック氏の情熱と誠実さを伺い知ることができます。

実際、ドン・ベック博士は、新世紀における「活動する哲学者」と呼ばれています。テキサス州デントンでの国立バリューセンター(National Value Center)の共同創設者、スパイラルダイナミクスグループ(Spiral Dynamics Group, Inc.)の会長兼 CEO などのグローバルな努力を、彼自身の定義によるところの「スパイラルウィザード(Spiral Wizard)」として、スパイラルダイナミクスのモデルを世界の様々な領域・社会で大きなシステム変化をもたらすものとして活用しています。また彼は、クリストファー・コワンと共著で、1996年に「Spiral Dynamics: Mastering Values, Leadership, and Change(スパイラルダイナミクス: 価値観・リーダーシップ・変化の習熟)」(邦訳未刊行)を上梓しました。これは、クレア・グレイブス教授(故人)により提案された、人間発達に関する「価値システム」理論に基づき、それをさらに発展させたものです。ベック氏は、長年に渡るコンサルティングの経歴を通じ、英国政府でトニーブレア首相の政策部門担当者との面会、シカゴ中心地ではその教育機関が直面している問題への言及、世界銀行ではアフガニスタンの未来への言及、さらには、主要銀行、エネルギー関係企業、航空会社、政府機関の会議室などと、様々な場所へと足を運んでいます。

ドン・ベック氏は、人種問題についてビル・クリントン元大統領と討議し、ネルソン・マンデラ大統領とは深い和解戦略を共有し、「民主的な南アフリカ」における平和の実現を通して中心的な役割を演じました。これにより、1996年、故郷のテキサス州政府より栄誉賞を受賞。最近では、「大規模な調停・変化・変容を扱う新しい導き手」(「スパイラルダイナミクス・インテグラル Spiral Dynamics integral (SDi)」と呼ばれています)として、スパイラルダイナミクスをさらに強力な道具にするため、インテグラル理論の思想家、ケン・ウィルバー氏、アーリントン学会(Arlington Institute)の会長、ジョン・ピーターセン氏らとも協力し合っています。

彼自身の豊富な経験に基づき、ドン・ベック博士は次のような観点から説明してくれます。歴史上かつてないほどに危機的かつ要求の多いこの時代は、人間の変容と地球規模での和解が必要であるわけですが、そう認識する者にとって、いまなぜスパイラルダイナミクスは非常に評価されるものなのかという点からの説明です。実際、ス

パイラルダイナミクスに精通するにしたいが、説得力に満ちたこの理論が、なぜ「人間の本質や知性における進化の重要性に関する新しい定義」に他ならないのかということが、容易に明らかになります。

---

スパイラルダイナミクス 8 段階の螺旋状の発展

## セカンドティア（第二層）：「あること（存在）」の価値ミーム

ターコイズ・全体性（ホリスティック）のミーム — 30 年前より出現

**基本概念:** 知性（マインド）と霊性（スピリット）を通して存在の全体性を経験する。

- ・世界は、われわれの集合知性と共に一つの動的な組織体である。
- ・自己（セルフ）は、独立した「個」と同時に、慈愛に満ちた大きな「全体」とけあった「一部」でもある。
- ・全てのものが、全てのものに生態的に正しくつながっている。
- ・エネルギーと知識が、地球上の全体的環境の中に行き渡っている。
- ・全体的・直観的な思考と協力的な活動とが期待される。

イエロー・統合性のミーム — 50 年前に出現

**基本概念:** 自分らしくありながら学びつつ、責任をもってフルに生きる。

- ・生きることは、自然の序列、システム、かたちあるものの万華鏡である。
- ・存在の素晴らしさは、物質的所有とは関係のないところにその価値をもつ。
- ・柔軟さ、素朴さ、機能性が、最優先される。
- ・相違が、相互関係と自然な流れの中へ統合され得る。
- ・混沌や変化も自然なことであることを理解する。

「私が提案しているのは次のようなことです。行動システムが古く低いレベルから新しく高いレベルへと進展するという従属関係において、人の実存的諸問題の変化に伴い、開かれ、解き放たれ、揺れ動く、螺旋的なプロセスであるのが、成熟した人間の心理である、と。」

クレア・グレイブス博士

## ファーストティア（第一層）：「生存」の価値ミーム

グリーン・共同/平等のミーム — 150 年前に出現

**基本概念:** 内的自己の平安の追求、他者と共にコミュニティ全体への気づかいを探索。

- ・人間の精神は、貪欲・ドグマ・分裂から自由でなければならない。
  - ・感覚・感性・気づかいが、冷たい合理性にとって代わる。
  - ・地球上の資源や機会を、全て平等に分け与える。
- 和解と一致のプロセスを通して決定に到る。

精神性の一新し、調和をもたらし、人間の発展を豊かにする。

#### オレンジ・達成/戦略のミーム — 300 年前に出現

**基本概念:** 勝つためにゲームをし、自己利益のために行動しろ。  
・変化と前進は、物事の枠組みに本来的に備わっているものである。  
自然の仕組みを学び、最適な解決法を求めることで進歩する。  
良い生活が、大量に作り出され広く行き渡るため、地球上の資源を操作する。  
楽観主義でリスクを厭わず自立した人々が、成功に値する。  
社会は、戦略と技術と競争によってこそ繁栄する。

#### ブルー・目的があること/権威主義のミーム — 5000 年前に出現

**基本概念:** 人生には、定められた結末による意味と方向と目的がある。  
超越的な「理由」・「真理」・「正しい道」へと自己を犠牲にする。  
永遠の絶対的な理念に基づく「命令」が、行動規範を強制する。  
正しい生活が、今の安定を生み出し、未来の報酬を約束する。  
衝動は罪の意識によりコントロールされ、全ての者が相応しい場所を有する。  
法律、規則、規範が、道徳的性質および人格を形成する。

#### レッド・衝動/自己中心性のミーム — 1 万年前に出現

**基本概念:** 手段を選ばず、自分のなりたい者になり、したいことをする。  
世界は、威嚇と略奪に満ちたジャングルである。  
自己の欲望を満たすため、いかなる支配と強制も自由に打ち破る。  
背伸びし、注目を期待し、尊敬を要求し、采配を振るう。  
後悔と罪の意識なく、今だけの自分を楽しむ。  
他の攻撃的な人物を制し、出し抜き、支配する。

#### パープル・呪術/アニミズムのミーム — 5 万年前に出現

**基本概念:** 精霊を喜ばせておけば、部族の住み家は暖かく安全である。  
精霊や神秘的なしるしの要求に従う。  
首長、年長者、祖先、一族への忠誠を示す。  
個人が集団に包摂される。  
神聖な物品、場所、出来事、記憶の保存。  
通過儀礼、季節のめぐり、部族的慣習に忠実である。

#### ページュ・本能的/生存的のミーム — 10 万年前に出現

**基本概念:** ただ生きるためだけのことをしろ。  
生存のための本能と習性のみを使う。  
個としての自己が、かろうじて意識あるいは維持される。  
食物、水、温暖、セックス、安全が最優先される。  
生活の継続のために生存集団が形成される。  
他の動物たちとは、一線を画して暮らす。

## インタビュー

**WIE:** ベック博士、スパイラルダイナミクスの基本概念の説明から始めていただけますか。

**ドン・ベック:** まず、スパイラルダイナミクスの概念としては、「人間性とは固定されているわけではない」ということとあげられます。われわれは、生まれながらに固定されているわけでない、と。むしろ、知性や脳のそれ自体の性質からみても、われわれは、新しい概念世界を構築していく能力を備えているわけです。ですから、われわれが描こうとしているものは、簡単にいえば、「人間というものがいかに、物事が最悪のときでも、新たな問題に対処するため、より複雑な考えを生み出しながら、そのような状況に適応していくことができるか」ということなのです。

**WIE:** 考えや認識をより高いレベルへ発展させるという、私たち独自の能力とは、いったいどんなものなのか、その辺りをもう少し詳しく説明していただけますか。

**ドン・ベック:** スパイラルダイナミクスは、次のような前提に基づいています。すなわち、われわれは、適応可能な知性、いわゆる「複合的で、適応可能な、文脈に規定された知性」というものを持っており、この知性が、われわれの生活状況や諸問題（スパイラルダイナミクスではライフコンディションと呼んでいるものですが）へ対処しながら発展する、という前提に基づいているわけです。われわれが常に注目しているものは、そういったライフコンディションを原因として生み出されるダイナミクスであり、さらにそういったライフコンディションに対処する中で洗練されていく、いくつかの対処機能や集団的知性であるわけです。これらの集団的知性のことを、ミームといいます。

**WIE:** 人間の知性に関する進化の性質を指摘されているようにも思われます。これは、実存的諸問題、もしくはライフコンディションというものに対して、私たちが適応し、そして生きながらえることを可能にするわけですね。ミームに関する進化の意義についてさらにお話していただけますでしょうか。

**ドン・ベック:** 遺伝子やウイルスやバクテリアと同様、ミームも、この宇宙においては同じ基本原理に従っています。つまり、更新するという概念であり、再生するという能力です。それぞれ先に続くミームは、新たに設定された優先順位や枠組みや特定の結論を伴いながら、より拡大された地平と、一層複合的な組織化の原理を含むことになります。これは、問題解決の方法でもあります。ライフコンディションに対処することで生じる「何が重要であり、なぜそうなのか」という問いに対して、優先順位を課していくという方法なのです。ちょうど、からだの全体を通して複製されていく生物学的DNAコードと同じように、ミームのコードも、生物・心理・社会・霊的なDNAタイプのスクリプトであり、文化全体を通して広がっていく設計図であり、文化表現、生存規範の形成、起源神話、芸術形式、ライフスタイル、共同体の理解といった全ての領域において使い尽くされるものなのです。

**WIE:** つまり、人間は、ライフコンディションに適応していくことで、新しい知性あるいはミームといったものを目覚めさせていき、これが文化の発展を形成していくということですね。

**ドン・ベック:** そうです。文化、そして国も同じように、こういったミームあるいは価値システムといったものが現れてくることによって形成されていくわけです。これは、集団を結束させる接着剤のようなものでもあり、自分たちが誰であるのかを定義するものであり、また地球上のどこに自分たちが居住しているかという場所をも反映しているものなのです。

私の長年の友人であり仕事仲間でもある、故クレア・グレイブス教授は、次のようなことに気づいておられました。人間の意識の進化に関する深いパターンというものが存在し、それは、心理的・文化的な存在、あるいは価値システムとして8つのレベルに分類される、と。これが、スパイラルダイナミクスの基礎となったのです。また、同じ原理または存在のレベルが、社会全体だけでなく、一個人にも適用されるのです。グレイブス氏は、自身の研究で何千人もの人々と接してきたなかで、常にこのような深いパターンを注意深く観察しておられました。また、これは、われわれの動的な神経学上の知識に関する異なった活性化レベルを反映しているとも、グレイブ氏は論じておられます。

**WIE:** スパイラルダイナミクスの概略を、8つのミームの階層または存在のレベルと一緒にご説明いただけますでしょうか。

**ドン・ベック:** グレイブ氏の言葉で借りれば、まず「ファーストティア（第一層）」が、「存在」または「生存」によって特徴づけられる6つのミームによって形成されています。これはつまり、われわれは神々よりも動物に近い存在であり、本質的に地上に根ざした存在としての諸問題に関わっていかねばならない、ということの意味しています。ですから、ファーストティア（ベージュ、パープル、レッド、ブルー、オレンジ、グリーン）は、「生計」や「生存」のレベルの関心によって構成された集まりなのです。他方、セカンドティア（イエロー、ターコイズ）は、情報が十分かつ高度に行き渡るグローバルな共同体という背景において、ファーストティア全てのシステムを健全なかたちで生み出すものとして機能します。なお、グレイブ氏は、9つめの可能性とともに、存在のレベルを8つに分類しておられるのですが、一方でスパイラルダイナミクスとは、拡大していきながら自由に変更されていく可能性をもち、継続的でダイナミックなものでもあります。最終的な状態、究極の目的地、ユートピア的パラダイスといったものは存在しないわけです。これは、終わりのない上に向かって進む探求であり、それぞれのステージが次のステージの前兆となり、さらにそれがその次のステージの前兆となる、そしてさらにその次のステージへと続いていく……というもののなのです。

**WIE:** そうすると、こういったステージやミームをスパイラルに上昇させていく動因とは、何なのでしょう。

**ドン・ベック:** われわれが直面する危機です。なぜなら、これらが、人間の発展を次のレベルへと移動させる引き金となる変節ポイントや基準点をもたらすからです。存在のレベルやミームの一つ一つは、硬直した階層的なステップというよりもむしろ、浮かび上がる波のようなものであり、流動的な生きたシステムなのです。ひとたび新しいレベルが文化において現れると、以前に獲得された全ての発展ステージは、価値システムの一部としてそのまま残されます。ケン・ウィルバー氏の言葉でいえば、それぞれの新しい社会ステージが、以前に獲得された全てのステージを「越えて含む」ということです。この理由から「より複合的な思考システムは、より大きな自由度を有している」といえるわけです。

**WIE:** 心理的文化的発展に関するこれらの進化ステージ出現を図示するのに、なぜ、スパイラルモデルを使用するのですか。

**ドン・ベック:** 人間のシステムまたはミームが、複合性のレベルを増加させながら進化していくため、こういった人間のシステムやミームの出現を描写するには、スパイラルの渦が最適なのです。それぞれのミームがその時代状況の産物であるということから、スパイラルに上昇する回転の一つ一つが、既に存在するものの頂点へ、さらに洗練された覚醒として示されるわけです。そして、これらのミームが、複合的に増加するスパイラルを形成していくのですが、こういった増加する複合性は、一個人や家族、組織、文化、社会といった範囲にも存在します。われわれは皆、絶え間なく流れる状況の中で生きているのです。新しいワインがいつも古い皮袋に入れられるのです。そして、次のことから、このような全体的な進化のプロセスが実際に機能していることが分かるはず。すなわち、われわれは、何千万代もの年月の間、敵対的な環境と戦いながらも何とか生き残り、まだここにいるわけですから。われわれは、生まれながらに自分自身を更新する能力を備えた素晴らしい種族なのです。このことが、われわれを人間にしているわけです。

---

#### \*「ミームの概念」

ミームの概念は、1970年代中ごろ進化生物学者のリチャード・ドーキンスによって最初に提唱されました。彼は、文化の進化は遺伝的または生物学的進化から独立したものとして考えるべきであると信じていました。ドーキンスのいう「ミーム」は、「文化的伝達装置の構成単位」のことを意味します。その例は、歌や、思想や、服装ファッションといったいくつかに限られます。しかしながら、スパイラルダイナミクスにおいては、これらは「小ミーム」と呼

ばれるに過ぎないものなのです。ベックが「ミーム」という言葉を使用するときは、「価値システムの中心」または「価値ミーム(バリュー・ミーム)」といったものについて語っているのです。これらは「組織化の原理」といった役割を果たすものであり、これら自身が小ミームを通して表現されているものであり、また、あまりにわれわれの思考の中心的なものとなっているため、これらは「人々の集団全体および諸文化全体に行き渡るものであり、それら自身において枠組みを構成するもの」なのです。

「超えて含む」

## 超えて含む

*transcend & include*



「新しい世界観が現れてきても、それ以前に現れていたミームが消えてしまうということはありません。むしろ、それらは、全体の流れの中に包摂するかたちで残され、より複雑な生活のあり方として織り込まれるだけでなく、万一、それらが必要な問題が生じるかもしれない場合に備えた“待機”として残されます。ですから、システムがわれわれに内在しているわけであり、世界観のミニチュアのそれぞれが、異なった生存問題に対応することになります。ちょうどロシア人形のようなもので、システムの中にシステムがあり、その中にまたシステムがあるというわけです。」

イラストにあるスパイラルの断面図が、どのように新しい社会ステージやミームが、それ以前の全てのものを、“超えて含む”関係にあるのかを示しています。



最近までずっと、科学技術のもたらす満足やめまぐるしい日常の所要などに追いまくられおり、またそうしていること、つまり、私自身が、進歩・発展を生み出す存在であると考ええていました。しかし、ミームという「進化の発展段階」を表すスパイラルダイナミクス・モデルのおかげで、次のような見方に到ることができたのです。つまり、ベージュの本能、パープルの神秘主義、レッドの自己主張、ブルーの従順、オレンジの物質主義、グリーンの平等主義……という見方です。自分自身を個人的にも全てのミームに関連づけることができるわけです。

そしてこのことが、「スパイラルダイナミクスが、いかにして人間進化を現実的かつ理解可能なものになっているか」ということを物語ってもあります。人類全体の歴史段階が、私個人の中にも現れているのです。新しいミレニアムを迎えると同時に、人類は、スパイラルのセカンドティア（第二層）をも迎えようとしている。私にはそう思えるのです。

しかし、スパイラルダイナミクスによれば、ファーストティア（第一層）の全てのミームは、いかに洗練されているように見えても、根本的には「生存」に基づくものに過ぎないとのこと。つまり、私自身、アウディーや携帯電話やパームパイロットに囲まれながらも、単に生存主義的モードの下でしかあり得ないということでしょうか。実際のところ、私自身も、自分の中での「進化に伴う伝承」というものについてじっくり考えたこともなく、そのことがおそらく、「その日その日を何とかや

り過ごすということが私の最大の関心ごとで過ぎない」ということを示しているのでしょう。しかし、スパイラルダイナミクスによれば、私が意識しているかどうかに関わらず、ミームという「複合的に適応可能かつ文脈に依存する知性」は、数千年間ずっと発展しつづけながら、「内的なパレット」として私のものの見方を色づけし、「可能性のスペクトラム」としての有益性をもたらしてくれているわけです。

---

## ミーム



## ベージュ

**WIE:** スパイラルダイナミクスのモデルは、10 万年前に始まる最初の「存在のレベル」であるベージュのミームの出現から、私たちの進化の発展を図示していくわけですが、人間の発展のこの最初のステージを定義するもの何なのでしょうか。

**ドン・ベック:** ベージュは、生まれながらにもつ基本的な生存の知識といったものを引き金にして動かされる「命令的な心理的欲求」であり、事実上、「無意識的な存在の状態」であるといえます。その最初のかたちは 10 万年前に始まり、「存在のベージュレベル」は、われわれを人間にする最初のステップです。単に人間が、他の動物もいる環境において生き延びようと格闘しているわけです。ただし、われわれは、より洗練されていて、所有物を保存し、他の捕獲者から逃れるために家族的集団を形成するという、概念的なスキルを有しています。このような「生存のための部族集団」においては、父としての首領が最初に食事につくこととなります。最も強いこの人物が死んだ場合、その家族集団には生存の望みがなくなってしまうからです。ですから、ベージュにおいて鍵となるものは、よく見ることができる、よく聴くことができるといった高度な感覚のシステム（背筋がゾクツとして髪の毛が逆



立つことで物事を感じる殺気のような)本能的な知性を用いたサバイバル技術なのです。簡単にいえば、「生き残っている」ということが、何にもまして最も高い価値を持っているということです。

**WIE:** 今日の世界においても、ページュの事例として残っているものはあるのでしょうか。

**ドン・ベック:** 今日、素朴な状況で唯一本物のページュとして存在するものは、インドネシアやアフリカの一部に隠されてしまっているでしょう。しばらくの間、私は、ブッシュマンの調査をしたことがありますが、彼らは、「どこに水があるのか、どこにダチョウの卵が埋もれているのか」を呼び起こしたり、天気の変化を感じることができたりといった「神秘的な能力」を備えていることは明らかです。したがって、彼らが「原始的である」ということを、いわゆる「無知である」ということと同じにはできないわけです。実際、遠く離れたものを見る能力(これはこのレベルにおいて備わっている価値・能力ですが)などを含めて、16もの異なった感覚が存在することが可能です。ただ今日、われわれの中では、これらの感覚のほとんどは、萎縮してしまったか、複合的な概念システムに覆われてしまっています。

**WIE:** 実際には、このページュ・ミームの「素朴さ」を代表しているわけでもなく、原始的でもない人が、場合によっては、ライフコンディションに応じて、ページュレベルになることを強いられる、ということはあるのでしょうか。

**ドン・ベック:** そうですねえ。食べるものを見つけたらその場で奪ってしまうような、基本的に狩猟採集者であるような路上放浪者の中に、ページュの断片を見出すことはできるでしょう。ソマリアやエチオピアでの極限的貧困という恐ろしい状況下で「その日暮らし」しかできないという場合、そのようなことを確かに確認できます。また、飢えたときは食べるだけという新生児もそうでしょう。さらにまた、大災害に見舞われた人々が、ページュに退行してしまうこともあるでしょう。個人的な悲劇や、極限的な苦難、または喪失といった状況の中において、突然、高位の優先順位が消失してしまうわけです。「恐怖」が動因となるところでは、確かにある種の「虚無」や「無意味」が存在します。なぜなら、そこでは突然、「分別」や「期待」といったものが消失してしまい、ただ自分の足だけで立ち、ただ自分のたくらみでしか生きられないからです。何か全く異質なことをしなければならないとき、今まで一度もしたことがないことや可能かどうか確信がもてないことをしなければならないとき、われわれはこのような感覚に陥ります。「9月11日の出来事」以降、非常に異質な心理的状況に追いやられたがため、人々が一時的にページュに戻ってしまったのを目撃しましたが、これもそうであると私は思います。

## パープル ████████

**WIE:** スパイラルにおける第二のレベルは、パープルです。ページュの原始的存在から次の存在のレベルであるパープルへ移行するにあたり、どのような進化的発展が特徴づけられるのでしょうか。

**ドン・ベック:** パープルは、アニミズム的、部族的、神秘的であります。このようなパープルの世界において、「一定の親族または部族に属しているがゆえに、私は何者かである」という同族意識による人間集団の最初の証拠を見出すこととなります。氷河期の間、世界は人口過剰になりました。いままで以上に一定面積に占める人間の数が増えてきたわけです。ページュのシステムにおいては親族集団がありましたが、それらは、生存に適した場所の争いを巡って別の親族集団との衝突を始めていました。そして突然、緩やかな集団であった一つの親族集団が、400人から500人単位の部族へと結集されたわけです。そうすることで、かつての親族集団が、他の親族集団との競争の中で生き残ることができるからです。つまり、ライフコンディションの一つが変化したのです。この変化により、ページュから、そういった領土の問題や資源へのアクセスに対応できるパープルへと移行されたわけです。

そして同時に、「因果関係に対する現実的な理解に覚醒する」という異変が、初めて脳において生まれました。これは、形而上学的なものへの最初の感覚でした。ページュの知性においては、諸々の出来事は「ほとんど予期できないもの」として、「それぞれがつながりなくばらばらなもの」としては捉えられていました。しかし、たとえばアフリカ

においては、もし満月になり雌牛が死んだならば、パープルの知性は、この二つの出来事をつながりのあるものとし、「一方が他方を引き起こした」と捉えます。ですから、形而上学的なシステムへの覚醒は、集団的結束をより強固にする能力と共に、約5万年前の氷河期に生じたライフコンディションの変化によって急に引き起こされた「原始的な人々(ページュ)から神秘的な人々(パープル)への移行」において発生したものといえるでしょう。

**WIE:** 「結束し共に働くための能力」が現れたことが、文字通り、生存の機会を向上させたかのようですね。

**ドン・ベック:** 全くその通りです。「文字通り」そうなのです。そして、これらの生存のステージまたはミームが、生物的・心理的・社会的システムを代表しているので、生物学のおよび身体的な能力や技能の進化的な出現をも指し示すことになるのです。たとえば、様々な健康的な利益をもたらす脳内化学物質オキシトシンの量は、人が集団で食事をしたときの方がより多くなります。ですから、一緒に食べたり、種々の祝宴についたりということの全てが、脳内のオキシトシンレベルを高め、生存能力を向上させるわけです。もう一つ、この時期に発達したことは、どのような脳内物質であれ、それが人に「内なる声」や「霊の声」というものに耳を傾けさせることを可能にしたという点です。パープル・ミームは、「優れた直観」や「場所や物事への感情的執着」、「因果関係への神秘的な感覚」といった、いわゆる「右脳の傾向」を多く含みます。東アフリカのズールー族の人々と一緒に「聖なる場所」において長い時間を過ごした際、私自身、パープルの感覚がかなり発達していたはずで



## レッド ■

**WIE:** そのような儀礼や部族集団を得て、パープルは、ページュの原始的な存在からかなりの飛躍と遂げたようです。スパイラルの次のレベルであるレッドは、どのようにしてパープルから立ち起こってきたのでしょうか。そしてレッドを特徴づけるものとは何なのでしょう。

**ドン・ベック:** レッドの領域において、われわれは最初の「あからさまな自己中心性」というものをもつことになりました。「私は何者かである」ということです。およそ1万年前のことです。ライフコンディションの変化は、レッドを失敗ではなく成功へと導きました。パープルにおいてわれわれは大きな成功を得ることができました。食物を見つけ、生活様式を安定させ、生活において危険と考えられてものを克服することができました。全てはスムーズにはかどりに、退屈にさえなってきました。そして多くの若者たちが不満を抱くようになりました。彼らは自分たちのことを「守られている」というよりはむしろ、「包囲され、制限されている」と見なし始めたのです。そしてレッドが一気に歩み出したのです。すなわち、エリートとしての個人が現れ、パープルの結束の構成要素であったところから飛び出し、「度を越す」に到ったのです。こうして、パープルが成功を通して得たものが、今度は、「強力な個人」を必要とし始めたのです。たとえば、「丘の向こうへ連れて行くこと(選挙)」を行なう十分な時間がない軍事的状況において、そのような個人は、権力を志向し、支配力を行使することになったのです。そこで自由に飛び出てきたものが、「あからさまな自己」であるわけです。すなわち、それらの「自己」は、「集団の秩序に背く者」であったり、「集団の合意に異説を唱える者」であったり、「暴力的な力を行使しようとする者」であったり、「我が道を単独で歩む者」であったり、「権力志向の自己」であったり、「自己の満足を追及する者」であったりするわけです。

**WIE:** レッド・ミームの肯定的な面を理解するのは、さらに難しそうですね。人間の結束や形而上学的な感覚を強調している点で、私は、パープルの方に魅力を感じます。

**ドン・ベック:** レッドも含め、全てのミームには、肯定的な面と否定的な面の双方が存在します。レッドにおいては、高い犯罪率や、あらゆる種類の怒りや反逆が見受けられます。しかし、創造性、英雄的行動、伝統を打ち破り新しい道を切り開く能力といった、素晴らしいものの発露を見出すこともできます。そしてレッド的な反逆や衝動は、パープルが結束により物事を固定させたがゆえに生じたものなのです。また、レッドは、パープルのシステムによる若者への儀礼や生贄の強要(苦痛の伴う通過儀礼など)に対する反抗でもあったわけです。これゆえに、レッドがパープルの次に現れたものであり、パープル自体が、レッドのステージを用意したともいえるわけです。

ここは非常に重要です。この相互関係をぜひ理解していただきたい。ミームは、「ただばらばらに漂っているだけのもの」ではないのです。レッドは、パープルよりも優れているわけではないのです。「優れている」のではなく、「異なっている」のです。ですから、真っ先に「ライフコンディションは何か」について尋ねる必要があるのです。ライフコンディションが、強く自己主張的であることを要求し、悪条件から逃れるため戦うことをも要求するのであれば、レッド・ミームこそが、その要求に即したあり方となります。レッドは、常軌を逸しているわけではなく、ミームのレパートリーの一つとしては正常なものです。この視点は、スパイラルダイナミクスの基礎となるものです。ですから、ミームに関して次のようなことを受け入れることです。すなわち、ミームは、単に「優劣の序列」を表すものではなく、むしろ、それぞれが肯定的にも否定的にも表現されるということ。さらに、スパイラル全体が、各種多様なミーム・コードを伴いながら一個人の中に存在しており、ライフコンディションの変化に伴い「何が要求されるのか」ということに応じて、常に呼び出されるものなのです。

## ブルー

**WIE:** そしてスパイル4つめのミームです。では、レッド的個人主義と自己中心性によって生み出された、ライフコンディションの諸問題からお話していただけますでしょうか。これらの諸問題が、究極的には次のレベルであるブルーへの移行を要求することになったわけですから。

**ドン・ベック:** ブルーにおいては、「超越的な目的の探求」・「秩序と意味の重要性についての認識」・「一つの高遠な力に支配された宇宙」というものが存在します。社会は、争いや集団的闘争や闘争的指導者といったものが付随するレッドの存続では、もはや機能しなくなったのです。ですから、レッドの成功によって生み出された諸問題を解決するためには、成長しなければならないのです。ここで初めて、罪を感じる能力があらわれます(レッドは、恥は感じますが、罪は感じません)。ブルーのシステムにおいて、人々は、権威主義や独裁主義や自己犠牲を普遍的善として喜んで受け入れます。

ブルーの発展において最初にならなければならないことは、レッドを抑えることです。このため、旧約聖書には「目には目を、歯には歯を」といった刑罰法があるわけです。非常に重いレッド的要素が存在している場合は、宗教的・法的制度においてブルー的にも非常に重い刑罰法が存在することになります。これは、レッドの脅威を抑えるために作られたものなのです。ですから、レッドの脅威が存在するかぎり、ブルーによるこのような刑罰法も存続することになります。ただし、ブルーがレッドの暴力から離れるしたがって、より制度化されたシステムが確立されていき、生活のサイクルはさらに健全なものへと移行していきます。このような制度化されたシステムにおいては、公正、規律、義務、安定、忍耐、秩序といったものが、広く行き渡ります。

同時に脳において生じると思われることは「高度な抽象化の能力」であり、この抽象化の能力自体が、「原因」、「偉大なる出来事」、「主義」といったものに固執することになります。たとえば、仏教の八正道やイスラム教の思想、これらはいずれも抽象的なものです。ですから、再び、形而上学の領域に入ることになります。しかし今度は、パープルで精霊だったものが、「強力な要塞がわれわれの神である」というかたちに組織化されます。したがいま

して、これは、一神教やゾロアスター教あるいは全ての「主義」といえるものの誕生となります。これらはおよそ 5000 年前に突然あらわれ始めたものです。これらの「内容」は異なっていますが、「思考の様式」は全て同一なのです。

**WIE:** 世界の宗教というものをこのような観点から考えたことは一度もありませんでした。それぞれの「内容」は異なっていますが、発展についての同じ進化のステージを表しているわけですね。

**ドン・ベック:** そうです。なぜなら、これらのミーム・コードは、設計図または磁石のようなものだからです。われわれが「ブルー」と呼ぶミーム・コードは、「超越的目的を見つけるもの」だということです。そのような超越的目的とは何なのでしょう。それは、仏教でもあり、ユダヤ教でもあり、イスラム教でもあり得るわけです。これらの宗教的表現は、ミーム・コードとしては、表現方法そのものとして関わるだけなのです。したがって、それぞれの「主義」の間で聖戦が行なわれたとしても、双方ともブルー・コードということになるわけです。というのは、核心となる価値システムやミーム・コードそれ自体と、これらの表面的レベルとは異なっているからです。



## オレンジ

**WIE:** 制度的、規律的、絶対主義的なブルーは、どのようにして、スパイラルモデル5つめのレベルであるオレンジ・ミームへと上昇するのでしょうか。

**ドン・ベック:** オレンジは、前進、向上、進歩に関することです。これまでのミームと同様、ブルーの基本概念も、一度それを究極まで使い果たして、大きな成功を得ることができます。ただそのとき、何が起こるのでしょうか。個人は落ち着きがなくなり、「しかし、私は個人としての自立性を主張したい」ということになります。これに対してブルーは「ノー」というわけです。「おまえは、従順のまま、制度・組織の命令に従わなければならない。天国へ行きたくないのか。平穏な余生をおくりたくないのか」と。そしてオレンジはこう言います。「もちろん。しかし私は、地上にも天国を作り出すこともできる。人生の楽しみをもっと増やすこともできると思う」と。かくして、偉大なる啓蒙が得られることとなります。すなわち、個人の精神が大きな拘束力を打ち破り、自由になるということです。

さて、ブルーのシステムが最初に現れたとき、それは妥当なものであり、必要なものでした。しかし、聖なる指導者が厳しく罰を与える者となり、疫病から人々を守ることができず信用を失ってしまったとき、オレンジの個人主義化が現れ始めたのです。およそ 300 年前のことです。こうして、ありがたいことですが、「科学的方法」が誕生したのです。また、「楽観主義」や「物事を変えられることへの信仰」を益々強めることになったのです。すなわち、「われわれは未来を変えることができるのだ」という信仰であり、「世界へ執行権を行使する者であり、支配権を有する」という信仰なのです。われわれは、自分自身のために「よき生活」を作り出すことができるということです。そして再び、ある素晴らしいことが「(西欧に代表されるような)合理的な脳」に生じます。それは、まず 1700 年代に起こったようですが、数学的知性や韻律の感性や線的知性といったのであり、これらが、音楽を書くことを可能にし、数量化と測量化を可能としたのです。こういった「古典的な左脳の能力」は、オレンジシステムにおいて「(西洋的な)合理的な脳」として独特に発達したものです。この素晴らしい展開は、全体として「西洋的なもの」などと分類されていますが、実際、その通りではありません。

**WIE:** このような言い方でオレンジについて語っていただくのを聞くと、ほっとします。というのは、私は、この特定のミームについて、否定的な影響ばかりを想像していたからです。たとえば、オレンジの産業化がもたらした環境破壊など。

**ドン・ベック:** だからこそ、われわれは、次の3つの事柄に目を向ける必要があるのです。「ライフコンディション」、「ミーム・コード」、そして「ミーム・コードが一定の文脈において表現されるあり方」です。オレンジのミーム・コードの表現である資本主義や消費主義が嫌いであっても、それは、このミーム・コード自体が嫌いであることとは同じではないわけです。このミーム・コードは、物事を処理し、向上させる機能に過ぎないのです。オレンジ・ミームに本来備わっているこの処理能力および創造力は、今日、環境を一掃できるものとさえなっています。実はこのため、われわれは、これらのミームやシステムを否定しやっつけることができないのです。ここから現れたものに挑むことはできます。しかし、オレンジ的な思考体系なしでは、医学的な問題を解決できなかったし、また、水や空気の浄化方法さえも見つけられなかったでしょう。そして、ブルーの神話と神秘主義の深みに沈み込んでしまっていたことでしょう。このようなことが起こるのは、誰も望まないと私は思いますね。

## グリーン

**WIE:** グリーン・ミームは、フィーストティア（第一層）の最後のレベルです。このミームがどのようにしてオレンジから現れてきて、人間性が現れてくるスパイラルの上昇においていかなる役割を演じるかについて、お話いただけますでしょうか。

**ドン・ベック:** この頂上において、グリーンは、「共同主義者」であり、「平等主義者」であり、「総意の一致を求める者」であります。オレンジなしにはグリーンはあり得なかったでしょう。なぜなら、オレンジにおいては、内面的なものは回避・無視されていたからです。科学は、心や魂に関する感覚を麻痺させ、われわれを単に「外部的な成功のみを感じる者」にしたのです。「よき生活」は、ただ物質的なもののみがその基準となったのです。こうして、「自分自身からも他者からも、自分を疎外させてしまったこと」に、われわれは気がついたわけです。ですから、およそ150年前（産業、技術、裕福、啓蒙の時代を克服するものとして現れた）この最新のミームであるグリーンは、「このような産業・技術・裕福・啓蒙といった事業の全てにおいて、基本的な人間性が無視されていた」ということを宣言するわけです。グリーンにおいては、焦点が「個人的達成」から「グループ・共同体主導の目標・目的」へと移行します。われわれは皆、一つの「人間家族」であるというわけです。

グリーンは、まず、自分自身の中に平和を築き始めます。そしてさらに、社会における不一致や衝突といったものに目を向け、そこでの平和の実現をも望みます。すなわち、オレンジやブルーやレッドによって生み出された経済格差や不平等に取り組み、そこに平和と友好関係をもたらして、われわれ全てが平等に分ち合えることを望むのです。性的役割は固定されたものではなくなり、ガラスの天井は開き放たれ、賛同を得た活動計画は実行され、社会階級は曖昧となります。スピリチュアリティー（霊性）は、無宗派的・無教派的な「統一」に回帰します。

**WIE:** そして、グリーンは、ファーストティア（第一層）の最後のレベルとして、スパイラル・セカンドティア（第二層）である「あること（存在）」のレベルへ私たちを導く準備となるべきなのですね。

**ドン・ベック:** そうです。なぜなら、グリーンが到達したのとは、かなり肯定的な言い方をすれば、スパイラルの浄化であり、人生でのあらゆる異なった経験における平等性の宣言なのです。これは、ブルーとオレンジの支配を弱めてしまい、たとえば、パープルやレッド固有の人々が CNN の枠をとって日の目を見ることを許してしまいます。確かに、平等や同じであることやそういったことの過敏さという意味では機能していますね。むしろ、良い目的においても機能しています。なぜなら、グリーンなしでは、われわれは、イエローやセカンドティア（第二層）に行くことはできないわけですから。



私はグリーンなのでしょうか。つまり、私は、環境問題に関心があり、平等主義者で感受性が強く、スピリチュアルで偏見を持たず、文化的なことに意識の高いといった人物のよい例なのでしょうか。きっとそうでしょう。グリーンであることは、霊的成長(スピリチュアルトランスフォーメーション)—イエローやターコイズ—への情熱を抱くことなのでしょうか。そうなのでしょうか。私の中の「グリーン的なもの」が、また同時に霊的成長を妨げてもいるのでしょうか。まさにそのとおりなのでしょう。これら全てのことは、非常にグリーンであった

私の両親から始まったのです。彼らは、教養があり知的で進歩的なタイプでした。両親ともに博士号を取得しており、ともに教師でした。彼らは、私が6歳のときに離婚しました。当時は、離婚といえばまだ珍しいことでした。私は、いわゆる「ブロークンファミリー出身」というグループに属していたわけです。しかも、両親のそれぞれの祖父・祖母さえも離婚の経験があり、これはもちろん彼らの時代では極めて「先進的」なことでした。ベトナム戦争反対のデモに参加している父の写真が、1970年のニューヨークタイムズの表紙を飾っていました。母は、父に対してばかりでなく、共和党についてもいつも苦々しく不満をもらしていました。母は、恵まれない小さな子供たちのために働き、熱心な擁護者として、子供たちを締め出していた学校に対しても批判的でした。

私の家族は、自己陶酔的な活動(レッド)に溺れる要素が多分にあり、他方、規律(ブルー)に関してはほとんどうるさく言うことはありませんでした。毎週教会には欠かさず通う(典型的なブルー)といった堅苦しい家庭が近所にいるような生活の中で成長していくのをちょっと密かに想像したりもしました。「組織の仕組み」や「役割分担」といったものに憧れていたのです。しかしそう考えた途端、その考え自体に息が詰まりそうになる自分もいました。そして、こうした私の物思いは、結局、「自分が家族を選択しているのだ」という考えに落ち着いたのでした。「家族の絆」やさらに言えば「家族の特質」といったものが欠けていたかのように見えて、最終的には、私の家族もまた、私を一つの開かれた可能性へと導いてくれたいたということに気づいたわけです。実際そのとおりでした。私のスピリチュアルな道程は、若いころから始まり、両親の文化的・人道主義的・哲学的な事柄への関心の高まりと共に、そのことが私にも活力を与えていたのでしょう。神学者のマルティン・ブーバーや、実存主義者のジャンポール・サルトルやシモン・デ・ボーボワール、小説家のD.H.ローレンスやジェームス・ジョイスといった人物たちの著作を読みながら、私は成長しました。そして今、私は40歳代。セカンドティア(第二層)への霊的成長の可能性という道程において、幼い頃に両親が与えてくれた多くの賜物に感謝しつつ、「グリーンへの成長が一つの否定的側面をもつ」ということを理解し始めています。そして、私のスピリチュアルな道程には、ナルシズム、傲慢な個人主義、階級や組織への抵抗といった遺物が、残骸として散らばってもいるのです。

ただ、家族のことに関して言うならば、こういった全ての「グリーン的なもの」は、実際、祖母から始まったのではないかとも思います。雨の降る肌寒い日、祖母ならばこう言ったでしょう。「ジェシカ、ニクソンみたいな空模様ね。鬱陶しくてたまらないわ。」



**WIE:** ベック博士、私の「中心的ミーム」がグリーンであることは確かだと思います。また、そう思うのは私だけではないでしょう。グリーン・ミームは、現在の西洋文化の先端でもあり、私ばかりではなく、多くの人にとっても主要な概念的・心理的パラダイムなのでしょう。ここまでのお話では、グリーンも含み、それぞれのミームは、肯定と否定の両方の側面をもっているとのこと。そこでお聞きしたいのですが、現在、グリーン・ミームは、どのようなライフコンディションの諸問題(これが私たちをさらなるスパイラルの上昇へ導くわけですが)を生み出しているのでしょうか。

**ドン・ベック:** 既にお話しましたように、グリーンは、イエロー、すなわちセカンドティア(第二層)へ向かうために不可欠なステップなのです。ただ、これは非常に「高くつくもの」であり、「貢献する」というよりも「奪い取ってしまう」ものでもあります。

**WIE:** 「高くつく」とおっしゃるのは、なぜですか。

**ドン・ベック:** 全ての人を救うためといつつ、ただ訴えるためだけにそこにいるという以外、何の貢献も必要としない。これが「高くつく」という意味です。高貴なる「偉大な社会の実現」という計画のほとんどはうまくいかず、たとえば、グリーン的な試みとしての「社会主義」も、「これもまた答えではない」ということに気づいたわけです。

**WIE:** 「貢献する」というよりも「奪い取ってしまう」とおっしゃるのは、どういう意味ですか。

**ドン・ベック:** オレンジが築いた資源などを使用しながら、他方では、オレンジを嫌い(オレンジ的な価値としての)成長にも背を向けているということです。グリーンにとって(オレンジ的な)成長と消費は悪なのです。既にある資源を使用して再分配し、皆が同じレベルに到達するというこそをグリーンは好むわけです。グリーンは素晴らしいシステムではありますが、ただ皮肉をいえば、グリーンは、全ての人が自分たちグリーンと同じレベルの裕福さを享受することを当然だと考えているのです。

**WIE:** 確かに、それは私自身の経験からも理解できます。物質的に高い私の生活水準は、非常に自己満足的であると同時に、非常に平等主義的さえあろうとしています。

**ドン・ベック:** そうなのです。オレンジにおいて成功した人々のみ、すなわち、銀行口座に十分な貯金があり、生存に関する保証もあり、扉の向こうに狼がいるような危険と無縁の人々のみが、グリーンを考え始めるのです。しかし不幸なことには、ブルーやオレンジのミームレベル(支配者に従順な修道女たちやオフィスにたむろする太ったおばさんたちなど)へグリーンが攻撃を仕掛けるとき、これは言うてみれば、屋根に登っておいて、ここまで登ってきたハシゴを投げ捨てるようなものなのです。

**WIE:** グリーン・ミームの否定的な面としては、どのような影響があげられるでしょうか。

**ドン・ベック:** グリーンの否定的な面が行なうことは、自分が見出した「格差」を解決しようとするあまり、不幸にも、オレンジやブルーの社会的・経済的システムの能力までも破壊してしまうことです。グリーンは、オレンジの経済

機構を破壊します。また、レッドを抑えておくために必要であったブルーの権威主義をも破壊します。こういった例は、今日のジンバブエの惨状からも容易に理解できます。いわゆる生産性そのものを否定してしまうわけです。こうして物事は悪い方向へと向かうのです。「レッドはブルー・オレンジから規範と目的を学ぶべき」という責任をグリーンは免除させてしまいます。グリーンは土着的な人々を愛するのですが、彼らをとりにけ「高貴なる野蛮人」と呼び、そこに必要以上に偉大で複雑なものを読み取ろうとする傾向があります。権威主義を破壊したりして、ブルーやオレンジのシステムを清めようとした結果、個人や社会の双方において、レッドの無軌道や自己中心的・衝動的な行動がグリーン領域へ侵入してきます。これは、レッドとグリーンの不健全な編み合わせであります。ここでは、強力な自己中心的ナルシズムが、「人間性や平等について威張り散らす行為」となって組み合わせられるのです。こういったことが、ケン・ウィルバー氏や私が「不健全なグリーン・ミーム」あるいは「ブーマリテリス」と呼ばれるもの（ブーマー世代が、初めて全体としてグリーン・ミームに至ったところからこう呼ばれています）を蔓延らせる土壌をつくってしまうのです。

**WIE:** ケン・ウィルバー氏の著書『Boomeritis』を読んで、確かに私自身も、実際このようなポストモダン「ウィルス」に侵されていることを認識させられましたね。

**ドン・ベック:** そうでしょう。「不健全なグリーン・ミーム」という考え方自体が、一つのレトリック的な戦略なのです。「どうすれば、グリーンから枷はずして、さらに上昇し続けることができるのか」とケンと私は問うわけです。われわれからは、グリーンにおける極めて多くのものが「澱んだ池」のように見えます。ですから、「不健全なグリーン・ミーム」という言葉をあえて使うわけです。われわれは多少とも恥じるべきなのでしょう。自分に鏡をかざして何をしているのか見極めるべきなのでしょう。真に健全なグリーンから不健全グリーン・ミームが離れていくという願いを込めてね。政治的正当性における（不健全グリーン的）信念の自己中心的な性質、不誠実さ、不自然さというもの人々の目にさらすことです。そうすることで最終的には、「このグリーンを越えたものがある」ということを明らかにすることができます。こうした思い切った処置やレトリック的な戦略が、「彼らが行なっていることは、実際、彼らが本当に到達したいものを破壊しているのだということを理解してほしい」ということの象徴となるわけです。

**WIE:** 不健全グリーン・ミームは、霊的・心理的にはどのようなことがいえるでしょうか。

**ドン・ベック:** グリーンは、「私は自分自身について知りたい。自分の中に秘められた幼児性について知りたい。平和を実現したい。安らぎを求めたい」という「自分さがし」から始めるのです。「だから私は感性トレーニングセッションに参加し、そこでフィードバックを得て、深い内面に到達し、自分の経験の全てを見つめ、そして罪悪感を拭き去るのだ」と。グリーンは、罪悪感を嫌います。そして、起こってしまったことに対し被害者ヅラをしていつも憤慨しています。しかし、グリーンは相対的なシステムでもあります。グリーンは多くは、あまりにもナイーブに「全ての人々は善人であり、社会が彼らを悪人しているのだ。悪人などいない。悪などない。そんなのは全て神話に過ぎない。全ての人々が私たちを愛するようになるのだ」と考えているのです。そこで、たとえば、「9月11日の出来事」などは、これらの考えに対する一つの警告ともなりました。初めてグリーンがレッド・ブルーの醜い面を見ることができたのです。以来この点から、より多くの人々がわれわれのしていることに興味を抱き始めてくれました。





母は、私の人生における超越的瞬間というものに少なからぬ影響を与えました。それはたいてい音楽やダンスに関連していました。母は、ロシア人ダンサーのナタリア・ナカロバなどの舞台芸術を見るため、私をよくニューヨークのリンカーンセンターへ連れて行ってくださいました。バレエの名作がナカロバの手にかかると、すばらしく崇高で超越的なものとなり、感動の涙を誘ったものです。「ロミオとジュリエット」の最後の場面などは、特に並外れた演技であり、恐らく四千人におよぶ観客全員が揃って畏敬の念を抱きつつ総立ちになったものです。それは一つのスピリチュアルな体験に他ならないものでした。私の方を振り向きながら、母はこう言ったものです。「ジェス、いまだかつてなくまたこれからもないであろう最も偉大なダンスを、あなたは目の当たりにしているのよ」と。

しかし、私が受け継いだ「グリーンの不完全なる羨」は、一つの矛盾でもありました。高度に美的でスピリチュアルな感受性が、感情的主張や安心に関するナルシスティックな要求と結ばれたというわけです。これは、自分を一種の不自然な状態に置いておくものであり、しかも自分ではなぜそうなのか分からないのです。14歳か15歳の頃までには、激しい渴望がしばし私の体験の中を漂い、それは私の外部のもの、すなわち異性への関心となりました。恋愛関係は、究極的な満足をもたらしてくれるものなののでしょうか。確かにそのように望んでいました。そして、こういった望みに一つの狙いを定めたわけです。いえ、実際は、たくさんの狙いを定めていました。

30歳になってまもなく、私は最初の師に出会いました。仏教の韓国人僧侶です。ある午後、師は私にこう言われました。「ジェシカ、あなたに関する全てのものは素晴らしい。ただ、男性を見る目は例外ですね」と。私の恋愛関係に関する長い裏づけの後では、この言葉の後半部分について真実であると認めざるを得ませんでした。前半部分についても私に訴えてくるものがありました。瞑想の実践者として、師は、非凡なる癒しと直観の能力を備えていました(パープル)。「私は、あなたが持ち得る最善の健康保険でしょう」と私を安心させてくれました。「あなたのいかなるものも治してあげましょう。」安心についてのお話。これこそ、私が求めていたものでした。加えて、どのように座禅を組み、霊性へと到るかについても学ぶことができました。完璧な組み合わせです。ある早朝、韓国の山中で、師が授けてくれた座禅技法を実践していたところ、突然、私のあらゆる思念が消えてなくなり、残ったものは、ただ、あらゆるものについての無条件なる「一体感」だけとなりました。しばらくして、師は私に韓国へ移住し、彼の僧院にて長期間の修行を始めることを薦めてくださいました……、そして尼僧(ブルー)。尼僧？「一体感」に関するこういった体験は、物事の真なる本質を明らかにしてくれました。韓国は、魅力的で彩り豊かな国でした。師の非凡なる才能にも惹かれていました。ただそれでも、尼僧になるということは、一大決心でした。私はおじけづいてしまったのです。私の中の「不完全なるリベラルな羨(グリーン)」と「ナルシスティックな衝動(レッド)」とが、こういった「生涯のコミットメント(ブルー)」を前にして、たとえそれがスピリチュアルであったとしても、息苦しいものと感じてさせてしまったのでしょうか。自分にも分かりません。ただ、ソウルにおけるある運命的な日、魂への長い探求の末、私は、セカンドティア(第二層)の道程への探求をどこか別のところであるという決心に到ったのでしょうか。

---

## ライフコンディション

**WIE:** 「新しい知性(新しいミーム・レベル)というものは、ライフコンディションに応じて形成されていく」ということをおっしゃいました。今日、「地球規模の人類共同体」というレベルで直面せざるを得ないライフコンディションが、歴史上かつてないほどに、より挑戦的かつ危険なものとなってきていることは、誰も否定できないでしょう。このようなライフコンディションや、これが次の進化の段階において果たす役割などについてお話していただけますでしょうか。

**ドン・ベック:** 良きにつけ悪きにつけ、人生における出来事とは、「人生についての基本的な規範や規律を学ぶ」ということにつきますようです。周りの自然環境を変えていくことから遺伝子操作まで、様々な科学的方法を駆使して人間経験を変えていく——そういった全てのことにおいて、われわれは驚くべき選択肢に晒されているわけで

す。ただ、「このことが何を意味していくのか」について誰もが承知しているとは、私は思いません。ですから、現在われわれが置かれているポジションは次のようなものです。すなわち、われわれは神々のように振舞っており、未来を変えることができる。これは、種族としても、いまだかつて持ち得なかった能力です。ですから、再び、失敗からではなく成功から、「自分たちが極めて危険なコンディションに直面している」ということを、われわれは見出して始めているのです。

そしてさらに言えば、複雑なオレンジ・ミームで開発され、かつてはブルー・コードの影響を抑える役割を果たしていた「核兵器などの力」が、いま、レッドにコントロールされようとしています。当のレッドは、ブルーの影響を受けていないため、規範や義務や責任を負わず、オレンジの技術力によって現れた「相互破壊の脅威」への責任さえ持ち合わせていません。レッドは、権力について近視眼的であり、これが問題の最悪な部分なのです。こういったことが、われわれが種族として直面する最初の危機であるといつてよいでしょうね。

**WIE:** このようなプレッシャーにさらに付け加えるならば、「生活が、その勢いを増しながらどんどん変化している」という事実でしょう。ここで一つ引用文を読み上げてみます。これは、発明家・未来学者のレイ・カズウェル氏によるものですが、われわれ人類が急激に貶められ同時に適応しようともしている「圧倒的な変化」について語っています。

数世紀前、人々は「世界が変化している」などとは全く考えていなかった。彼らの祖父祖母は自分たちと同じ生活を営んでいたのであり、また自分たちの孫も、また同じ生活を営むだろうと予想していた。そしてその予想は大方裏切られることはなかった…。ただ十分に認識されていなかったことは、変化のペース自体が加速しているということだった。過去の 20 年間は、これからの 20 年間にとってのよき道案内とはならないのである。パラダイムシフトの速度や進歩の速度などが 10 年度ごとに倍加しているのである。現時点までずっと加速してきているゆえ、この加速は、われわれが 20 世紀全般に渡って成し遂げた発展の量にも対応するだろう。20 世紀は、今日の変化速度における 25 年のようなものなのである。次の 25 年は、20 世紀の発展の 4 倍分を成し遂げるだろう。そして 21 世紀には、2 万年分に匹敵する発展を成し遂げるだろう。これは、20 世紀での技術的変化のほぼ千倍分に匹敵する。

**ドン・ベック:** これはすごい引用ですね。しかし、生物学的遺伝システムが、そのような変化量や速度に対応できる複雑なコードを内包していると、この引用は見なしているわけですね。免疫システムを研究している人々の間からは、われわれが実際、肉体面での要求さえ伴うそういった複雑性に対応できる能力があるのかどうかについては疑問もあがってきています。ですから、その引用は、「生命体がそのような変化にも同化できる」ということを前提としてはいます。実際どうなのかは私には分かりません。ただ、「今日われわれは驚異的な変化に晒されている」ということだけは分かります。なぜなら、何十億という人々が、スパイラルの異なった層やレベルを同時に行き来しているように私には見えるからです。ですから、「われわれの種族が一本の水平線に沿って前進している」というよりはむしろ、「複数の変化がスパイラルを上下しながら生じている」ということなのでしょう。多くの人々が、われわれが 300 年前に退いた領域に入っていくようとしています。

そして、マイクロチップが与えた影響なども他に付け加えています。もっと言えば、分子生物学の研究からより多くを学びながら、われわれは、いわゆる「遺伝子の神秘」をも明らかにしてきています。クローンや遺伝子操作も可能となりました。ただ、これをメチャメチャにしたらどうでしょうか。有機生命体の全てに襲い掛かる遺伝的悪影響やミスなどが解き放たれてしまったらどうなるのでしょうか。生態の最も深いコードを操作し始めたとき、カオス理論でいう「バタフライ効果」\*1 として、実際に何が引き起こされてしまうか誰も予想することはできません。このため、大きなストレスがわれわれに押しかかっているのです。これはまた、人々がより多く共同できるような「新しい組織形態」を探すことも意味するでしょう。というのは、こういった全ての事柄を把握しておくことができる個人などあり得ないからです。

**WIE:** 進化生物学者のエリサベット・サトゥリス氏は、「ストレスが、唯一、進化を引き起こすものである」と述べて

いました。今日のライフコンディションで経験している非常に強いストレスと、スパイラルを進化・上昇する速度の潜在性との間には、何らかの関係性があるのでしょうか。

**ドン・ベック:** そうですねえ、進化とは危機を伴うものです。一つの警告を伴うわけです。しかし、それ自体の中、あるいはそれ自体に関しては、上昇して行くことを保証するものではありません。もし門の外に立っているフン族が文字通り人々に襲いかかるのであれば、あるいは、突然、規模縮小や経済破綻によって失業の恐怖に脅かされるならば、複雑な思考をつかさどる能力や活力といったものが衰え始め、初期の低い優先順位がいきなり支配することになります。

ですから、「危機」に加えて、基本的なミーム・システムには「安定」も必要なのです。さらに、「新しい概念システムを生み出す能力」も必要となります。なぜなら、問題に晒されるだけでは、その社会全体が退行してしまうかもしれないからです。これが、まさにジンバブエで起こったことなのです。ここは、かつては十分な援助がなされた場所だったのですが。現在、事実上ここには、数百万人もの餓死者が発生しています。ですから、ストレスだけが、それ自体として(進化の)鍵とはならないわけです。ノーベル賞受賞者、イリヤ・プリゴジン氏が次のように述べていました。「過去のシステムが消耗し始めたとき、われわれは、より複雑なシステムへ上昇するか、より単純なシステムへ下降するか、いずれかの領域へ到達することになる」と。こういったことが、危機的な領域、決定的場面において起こるわけです。たしかに、ストレスによる危機は、ミームのパラダイムを突破するためにも必要なことではあります。しかし、それ自体の中やそれ自体に関しては、そこに必要とされる「出現」が成し遂げられることを保証するものはないわけです。いまのところは。

---

\*1「バタフライ効果」とは、カオス理論の本質を言い表しているものです。蝶一匹の羽ばたきが、大気の混沌とした運動によって増幅され、一つの妨害を引き起こし、結果的に大規模な天候の変化につながり、このため、長期間の規模での行動に関する予想が不可能になる、という考え方です。

---



**ターコイズ・ミーム**

連動する力が優雅にバランスを保つシステム



**イエロー・ミーム**

差異と変化によって洗練された混沌的有機体



**グリーン・ミーム**

生活経験を共有する人間環境



**オレンジ・ミーム**

可能性と機会に満ちた市場



**ブルー・ミーム**

究極的真理の支配により命令される存在



**レッド・ミーム**

最も強く狡猾なものが生き残るジャングル



**パープル・ミーム**

精霊的存在と神秘的兆しが生きている呪術的な場所



**ベージュ・ミーム**

人間本能で生存する自然環境



1981年から1999年までの間に60回以上は、私は、南アフリカを訪れたでしょうか。「戦略的發展」という計画を南アフリカで実行するためでした。その間、私の基本的な役割は、社会の様々な領域でステレオタイプ的に使用されている定義を作り直すことであり、日常での人種・民族差別的なカテゴリーを、ミーム的差異による価値システムの理解へと置き換えることでした。これらはすべてこのグローバルな小宇宙において生々しく見出されるものであります。南アフリカの現状における複雑さは、人種的な線引きによる道徳的善悪というものに簡略化されてしまっていました。もちろん、これは重大な間違いであります。多くの同情が、黒人たちの「苦闘」へと注がれましたし、それは正しいことです。しかし、彼らが欲していないもの(アパルトヘイト)を取り除くことは、彼らが欲しているもの(公平で裕福な社会)を得るということとは同じではなかったのです。最終的な分析の結果として、空想的な国家主義による黒人の一党独裁(今日のジンバブエのような)、アフリカーナ(ヨーロッパ系の南アフリカ人)たちによるそれよりもマシというわけではないのです。

ですから、アフリカーナフォルク(ヨーロッパ系の南アフリカ人)やそういった人々の人種に関する排他的で硬直した信仰に対して攻撃を行なうのではなく、むしろ、私は単純にアフリカにおける技術や農業の發展というものを促しました。これらこそが彼らの使命であると。アメリカの南アフリカ大使であるフランクリン・ソン氏は、次のように言ってくれました。私の仕事が、「白人たちに教育を施し、生活、溢れるばかりの生活が、アパルトヘイトを超えたところに存在するというのを彼らに分らせてくれた」と。このメッセージを広めるため、私は、テレビやラジオに出演し、全国各地の学会や公開講座にも足を運びました。続き物として私が書いた6編の記事は、1989年4月に南アフリカの新聞の全てに掲載され、プレトリアのアフリカーナ政治家たちを説得し、ネルソン・マンデラの釈放と和平プロセスの開始に影響を与えることとなりました。

しかし、私は重い対価をも払うことにもなりました。この仕事のため、南アフリカにおいて吊るし上げをくらうことにもなりました。この南アフリカにおいてさえ、「白人、人種差別主義者、アパルトヘイト制度に迎合するのか」と叫ぶグリーンの平等主義者のシステムからの攻撃に気をつけるようにと、クレア・グレイブス氏は忠告してくれました。私は、ただ、グリーンが望むものとは異なる解決法を主張しただけに過ぎなかったのです。グリーンが望むものとは、権力の再分配を即座に行なうことだったのです。なぜなら、グリーンは、ヨーロッパとアフリカとの間の發展に関する格差は、あからさまな人種差別のみに起因すると考えていたからです。グリーン的平等主義の不健全な主張は、ブルーやオレンジの社会的・経済的・政治的建築物を「脱構築」ということでした。これらの構築物のみが、人間の苦難を生み出していると考えていたのです。しかし、「苦悩する産業」でのそうした人々は、負の投資に対する戦略や制裁、西洋の孤立による成功、そういったものを受け継ぐことによる焦土化がいかなるものかについて全く考えが及ばなかったのです。事実、制裁は双方を傷つけることとなりました。職は失われ、二度と戻ってくることはありませんでした。医療制度は、ほとんど機能なくなりました。主要なインフラ設備も崩壊してしまいました。高い技術レベルを備えた多くの優れた人々が国を去っていきました。そして、エイズの蔓延です。社会全体を健全に変容させていくためのよりよい方法がもっと他にたくさんあると私は思います。南アフリカで制裁を支持していた多くの人々も、私にこう言ってくれました。深いダメージがこの国に永久に与えられてしまったことに気がついた、と。

もしもう一度やり直するのであれば、南アフリカの人々は、多くの事柄を違った方法で行なうことができるだろうと私は信じております。むしろ、実際、内戦や内乱がなくて社会が現われるのであれば、それは単純に素晴らしいことです。ただ、私にとって、アパルトヘイトは問題ではないのです。これは、ヨーロッパ的な様式や思想とアフリカ的な様式や思想が、南アフリカ的な織物へとうまく編み合わせできていないことからくる兆候に過ぎないのです。私が南アフリカへ赴いたのは、公平かつ民主的でありながらも何か全く異なったものが発見され、それが、新しいより複合的な考え方のレベルの出現によって運営され、われわれが共に直面するライフコンディションによって推し進められるであろうことを信じているからなのです。もしモザイク的な社会の断片が、共通の善のために共にうまく働くことができたならば、南アフリカは、地球全体における真の統合のための道筋を指し示すことができるだろうと私は信じております。もし深い対立についての本質を見出すことができたならば、おそらく、私は、彼らの大きな分裂に対する架け橋として陰ながら働くことができるでしょう。非常にたくさんの南アフリカ人が英雄的に関わってくれています。私は、単に先駆者、地図製作者、チアリーダーであるに過ぎません。ズールー族の人々が私に「Amizimuthi」という名を与えてくれました。これは、「よく効く薬を持つ者」という意味だそうです。

---



安心に関するファーストティア（第一層）的要求、その全てに同時に答えてくれるような「完全なるグリーン」というものが、もし存在するならば、私の場合、40歳のときにそれを見つけたこととなります。「緑の山の州」とよばれるバーモント州において、有機農場やその親切な人々に少なからず恵まれたことです。「理想の地」を求めて4万マイルもの距離を車でひた走り、文字通り州全体を十ヶ月間も巡りまわった末、私とパートナーはその地を購入したので、幻想的で絵葉書のような全く申し分のないニューイングランドの農場であり、田舎の農家や納戸、カエデ蜜の砂糖小屋、池、野原、そして180度前面に広がるバーモントの広大な山々の眺め。大地は肥沃で、あらゆるものが肥料としてしっかり定着していました。1940年代に撮影された一枚の写真には、15フィートにも伸びたトウモロコシ畑と共に、小屋の傍らで立つ農夫が写っています。私たちの計画は、生活の中に天国を作り出すため、小さな有機農業を始めることでした。私のパートナーの遺産があるのにそれさえも十分でなかったかのように、「これで経済的なことや生計には一切心配しなくてよくなるだろう」など考えていたわけです。それ以上に何を望むことできたのでしょうか。

それは、霊的成長（スピリチュアル・トランスフォーメーション）というものでした。私自身の霊的成長でした。私たちの新しい農地の魅力が色あせてくるに従い、このことにとらわれてしまったのです。実際、この農地を購入するずっと以前からとらわれていたのですが、ただ、あからさまに気づくことがなかっただけなのです（ファーストティアはしぶといのです）。私はまだ、さがし求めているものは、個人的な恋愛関係の中にこそ見出せると、考えていたので——上述のような、「自我主導型の夢」というものによって思想的に正当化された「決心」（つまり、グリーンと恋愛関係が一つのきっかけと掴んだというわけです）。だから私は、かき集め、刈り取って、抜きとり、自分のパートナーとの関係における「究極的な意味」というものを見つけようと試みました。しかしそれでも、私の中の不安がなくなることはありませんでした。

ある日の午後、スピリチュアル・ティーチャーとして知られるアンドリュー・コーヘンのお話を聞くため、私はボストンへと車を走らせました。私の中でとらわれ落ち着きを欠いていた部分が、その日に現れたもの——より高位の目的と何ともいえない可能性というものによって満足させられたのです。ただ、農場にもどると、私はもっと落ち着かなくなっていました。ある朝、私は、カエデ・シロップの缶が置いてある側のキッチンに立ちながら、一つの情景を目にしました。純粋なるエネルギーが吹き出し、私を頭から真っ直ぐにその情景へと引き込んで行きました。私は、木々を眺めていました。私たちの住むこの新しい農場、これ以上に美しいものは何もありません。ただ、私の居るこの「天国の片隅」がどれだけ素朴であり、私が自分自身のために作り上げたこの「個人的なライフコンディション」がどれだけ素晴らしいものであったとしても、もっと大きなライフコンディションが「否応なしに与えられる使命」や「より高位の目的」を生み出しつつ、世界は、熱心にそのかたちを作り上げようとしているのです。これらは、私のグリーン的な考えをずっと超えたところからくるもの、私の恋愛関係やカエデの木々や山々などというものをずっと超えたところから来ているのです。この地がどんなに美しくとも（確かに美しいわけですが）、単にそれだけでは不十分なのです。40歳にさしかかり、私のミッドライフ・クライシスは、「内からの命令」というかたちで現れました。生きることそれ自体のためにも、この使命に従う必要がありました。一ヶ月後、本物の霊的成長（スピリチュアル・トランスフォーメーション）の追求のため、ここを立ち去る決心をしたとき、父は、驚きのあまり腰を抜かさんばかりでした。哲学の教授を長らく勤めている父は、愛情をこめてこのように言ってくれました。「ジェス、私の子供たちの中でも、特にお前は、私が哲学者であるということを嬉しく思わせてくれる子だよ」と。さらにもっと何か言ってくれて、それを聞いたとしてならば、それは、セカンドティア（第二層）への飛躍へ踏み出すことの少しばかりの手助けになっていたことでしょう。

---

セカンドティア（第二層）への飛躍

**WIE:** 博士の仕事仲間でもあった故クリア・グレイブス氏は、私たちが導かれる進化の方向性について、一つの予言的感覚をお持ちでした。30年前、氏は次のように述べておられました。「人類は、一つの重要な飛躍に備えなければならない…。それは、生存の次なるレベルへの単なる移行ではなく、人類の歴史のシンフォニーにおける新しい“動き”である」と。現在のライフコンディションの中で生き残り、そしてセカンドティア（第二層）へ進化していくため、私たちに必要とされる「変容」についてお話いただけますでしょうか。

**ドン・ベック:** 1970年代後期、グレイブス氏は、自身の研究と観察を通して彼も説明できなかった「思考のパターン」というものに気づき始めていました。彼がテストする一定の人々の中で、意思決定やその他の認識に関する局面において並外れた資質と複合性を有する者がいることに気づき始めたのです。どうも、彼らは異なった種類の心を持っているようなのです。彼らは、より多くの解決法をより素早く見つけることができました。どうも、彼らは地位によって動かされているようでもないようなのです。恐れを抱くこともないのです。たぶんここがとりわけ注目すべき点でしょう。「恐れ」というものが消えてなくなっているようなのです。「用心」は残っているものの、「恐れ」がなくなっているのです。部族的安全（パープル）、あからさまな権力志向（レッド）、永遠性への救済（ブルー）、個人的成功（オレンジ）、受容の必要性（グリーン）といった全てのものが、驚くべきことに彼らの中では消えてなくなっているのです。その代わりに、「広大なる宇宙で生きているということのみ」についての好奇心がどんどん大きくなっているのです。

**WIE:** 確かに、「恐れが取り除かれる」ということは、人間存在を形成するための動機づけや人間の意識において、非常に大きな変換点を表わすことにはなりますね。このような「進化の移行への接近」に関して、クリア・グレイブス氏は、それ以外にどのような指標に気づいておられたのでしょうか。

**ドン・ベック:** 今日われわれが直面している諸問題について、これらがわれわれの眼前に明らかになるずっと以前、これらについて既に気づいていた「心」が存在し、このことに関する初期の証拠を彼は掴んでいたと私は信じております。彼は私にこう述べていたものでした。「恐らく一万に一つの割合で、異なった生態的特徴と周波数を備えた脳が作り出されていると感ずるので」と。そしてこう言われるのです。「これらの個人は、社会の規範に適合しなかった。なぜなら、その『心』は既に異なったパラダイムに向けてられていたからだ」と。そうして、彼はついに次のような結論に到りました。「ここで起こった独特な事柄は、単にグリーンの次の段階を準備するために現れたわけではない。どうも一つの新しいカテゴリーではないか」というのです。新しい考え方や複合性を必要とするライフコンディション（彼はこれに30年前から気づいていたわけですが）がついに現実に現れてきました。しかし彼は、マイクロチップよりも、冷戦終結よりも、DNA や分子生物学の発見よりもずっと以前に、このことに気づいていたのです。

ですから、深い本質的な変化が起こりつつあり、それはミーム・システムの最初の6つを組み合わせただけの総計ではなく、それを超えたものであるということ。ここにグレイブス氏は気づいておられたのです。もちろん、これは一つの理論でしかありません。しかし、われわれが直面している並外れた複雑性に目を向けるとき、この理論が、ますます信憑性を得つつあるようにも見えます。なぜなら、いま、われわれは地球を月から見ることができ、その表面下を貫くことができる素晴らしい分析装置や人工衛星をも手に入れ、初めてわれわれは、かつては全く不可能であったこういった方法によって地球自体を「一つの全体的な生態系」として理解し始めることができたからです。それと同時に、他方では、われわれが住む世界がミーム的文化表現の全てを一度に出現させようともがいてもいます——民族的な部族集団、自己中心的な軍事指導者、危険でもあり贖罪的でもある諸々の「主義」、日和見主義者や物質主義者たちのお皿一杯の成功物語、ポストモダンの平等主義者としての政治的、宗教的、職業的な構造の受け入れ。これでは、いい大人も泣きたくなくなるというものです。どうすればよいのでしょうか。

**WIE:** 確かに。これは大きな問いかけです。セカンドティア（第二層）への飛躍が、どのようにしてこの問いかけに答えることになるのでしょうか。



**ドン・ベック:** この時点において古いミーム・システムの全てがバランスよく組み合わせられ、消失してしまったかのようになります。セカンドティア（第二層）の最初のミームであるイエロー・ミームが完全に現れることが、これからの数年に起こり得る一方で、次のことも覚えておくことです。すなわち、この次なるミームレベルの究極的な様相および能力は、直面するライフコンディションの複雑性に十分対応するものであると同時に、それを越えるものに違いないという点です。それは、大きな全体像および全ての相互関係を把握し得るものに違いないのです。ですから、イエローは、以前に来たものに価値をおきながらそれを越えて含み、そしてこれから訪れるであろうものに期待をよせるという能力をもち、「より優れた垂直の視点」を兼ね備えているのです。

8つめのミーム・コードであるターコイズは、7つめのイエローとともに立ち上がってくるであろうと私は信じております。イエローを「感性の伴う左脳」と考え得るならば、ターコイズは「情報を伴う右脳」とも考えられます。ターコイズは、より大きな振幅およびエネルギーの流れというものに焦点を合わせ、地球上の様々な顕現において「生命のエネルギー」それ自体の代わりとして働くことになります。セカンドティア（第二層）の思考構造は、複雑な諸問題を扱うことができる「思考の深さと質」を求めるための、イエローとターコイズの要素の組み合わせとなるでしょう。これと共に、スパイラルの全体それ自体が「霊的（スピリチュアル）」であり、われわれは「人間的なるものの出現」というハシゴを登っているのであるという認識を得ることになるでしょう。このことが、「霊性（スピリチュアリティ）」なのです。

しかし、ミームとは、人々のタイプを示すものではなく、人々における「適応するための知性」のかたちを示すものです。この時代に生きる誰においても「イエローとターコイズが十分な範囲で存在している」というのは極めて稀なことです。異なった人々が、それぞれに異なった断片や部分や所見を有しており、そしてこのことが、私が「創造的脳の共同組織」と呼ぶものにおいて、洞察的な対話と相互作用による形成を、さらに重要なものとしているわけです。ですから、真剣な会話が初めて必要となってきたのです。その真剣な会話とは、皆がそれぞれに自分のことのみを行なうといった「孤立した会議」ではなく、「深い対話」を必要とするものです。このような難局において如何なる処置をとるか、再びこのようなことが、この時代の「実存的問い」となってきているのです。



「現時点においてわれわれの社会は、人類が今まで直面した中でも最も困難なしかし同時に最もエキサイティングな変化に立ち向かおうとしています。それは、新しい存在のレベルに向かうという単なる変化ではなく、人類の歴史というシンフォニーにおける新しい“動き”の始まりなのです。」

クレア・グレイブス

「われわれを取り巻くあらゆるものがそうであるように、われわれは、絶え間ない動きという状態の中に身をおいています。われわれは、スパイラルのコードによってかたちづくられていくのです。つまり、われわれは、自分の心理を変えることができるというわけです。脳はそれ自体において配線変更が可能なのです。社会は、スタティック（静的）ではないのです。今日の問題は昨日の解決法でした。発展や改革は、われわれの性質の一部なのです。われわれは、心の永遠なる道程を歩んでいるのです。われわれは、いま、重大なる変容、大きなターニングポイント、歴史的変換期といった中を通り抜けているのだと、多くの人々が信じています。新しく全く異なったパターンの考え方が、世界規模で人間活動の様々な分野において現れ始めています。」

このようなセカンドティアへのうねりは、完全に新しい次元での考え方や、新しい概念秩序への変化というものを伴います。最も大きな問題は、世界の回復です。つまり、それにより、生命（人命に限らず、あらゆる生命それ自体）が継続し得るということです。というのは、初めて人は、動物的・社会的な必要によってもたらされた妄想ではなく、宇宙の真実と知識に真に根ざした価値システムを基礎としたところから、あらゆる次元において存在そのものへと向かい合うことができるようになったからです。人類全体のタペストリーを眺めながら進化のスパイラルを上昇していくという認識の歩みに、心が突然ひらかれたというわけです。」

ドン・ベック & グラハム・リンスコット

The Crucible: Forging South Africa's Future

「試練：アフリカの未来を見据えて



私の一連の生活が、目の前で駆け巡りました。私が、バーモンド州の農場をあきらめ、スピリチュアル・ティーチャーの下で学ぶ者となり、霊的成長(スピリチュアル・トランスフォーメーション)に専心するコミュニティに参加したという、このことはさほど重要ではありませんでした。私の中のグリーン的なものは、いまだ消え去ってはいないでしょう(そのほか全てのファーストティア・ミームも、その意味では同じです)。ある日、友人のテリーがこう言ってくれました。「ジェシカ、あなたは、私たちがグループとして十分に環境保護的でないということに不満があるよね。でも、ちょっとあなた自身の生活も振り返ってみるといいわ。エコロジ的なイメージにもかかわらず、あなたがバーモンド州に居たときの方が、いまよりもずっと、たくさんものを消費していたわよね。」たしかにその通りでした。自家用車のアウトディーは家の前に駐車されたまま、無駄なショッピングに出かけることもほとんどなくなりました。多くの人たちと暮らし働き、電気・ガス・ガソリン・水道などもほとんど無駄に使うことはありません。もし私がほんのひと時でも、私の中の独善的で高慢なるグリーン的なものを弱めたらならば、客観的に言っても、実際、いまの私の方がバーモンド州にいたときよりも、ずっと環境保護的であることは認めざるを得ません。こんな風に明らかになるなんて何という皮肉でしょうか。そして、私の中で長らく保持されたグリーン的アイデンティティと共に、他のあらゆる種類の考え方や理想が暴き出され、ファーストティア・ミームのそれぞれが、まるでランプの束のようにせめぎあうわけです。

より高い見地のこうした新しい見方からすると、いかに私が自分自身と調和していなかったということに気づかされます。私の中のグリーン的な環境保護の意識は、いつも私の中のオレンジ的な物質主義と対立していました。私の中のレッド的な独立心は、いつも私の中のグリーン的な受容と総意一致の必要性との間で対立していました。そして、「不健全なグリーン」は、それ自体が、セカンドティア(第二層)に対立するものとして醜く歪んでいました。高潔な理想主義やナルシスティックな要求に誘惑され、そのため、「信頼」や「委ねて恐れをなくすこと」や「成長としての変容(トランスフォーメーション)」といったものへの発展的チャレンジを回避していたのです。

さて、ここで「エンライティンメント」に話を戻すならば、今まで見てきたように「誰も悟りを得たい。しかしながら、誰も変わることを望まない」といえるでしょう。ただ、正直に言えば、このことは自分には当てはまらないと考えていたのです。つまり、私は、自分はスピリチュアル(霊的)であると思っていたのです。私は、誠実であり、自己犠牲をものともしませんでした。しかし、より深いところでは、進化は、私の見方をも導いていき、こう理解するに到ったのです。すなわち、セカンドティア(第二層)への飛躍は、「重大な瞬間」であるという意味で、クレア・クレブス氏は正しかった、と。なぜなら、それは、内的葛藤と深遠なる内的解決との間の差異、つまり、私自身の中の全ての部分、全てのミームとの間の差異を指摘することに他ならないからです。ドン・ベック氏も指摘するように、それは「恐れがなくなること」でもあります。そしてこれは小さなことではないのです。つまり、完全に宇宙の只中でのことなのです。

そして、視点のこのような変化において、私はさらに次のことを見出しました。「全てのスパイラルは必要である」ということです。というのは、このことが、私が今日いるところに導いてくれたからです。すなわち、ドン・ベック氏がいうところの「自分が“限りなく上昇する探求”の一部であると気づくことによる少しばかりの謙虚さ」へ導いてくれたものなのです。そして「これは単に始まりに過ぎない」ということです。恐れや優柔不断から自由になること、人間性出現のスパイラルが絶えず上昇していくこと、その奇跡的なことへの畏敬の念をいなく自由を得ることをも意味します。そして、それを生み出した宇宙的な秩序への畏敬の念をいなく自由でもあります。洞察の深みと意識の広大な領域とが、スパイラルの高みからきらめき、本当の可能性が始まるのです。

#### 引用・参考文献

Excerpts and supporting material used with author's permission from Beck, Don E. and Cowan, Christopher, *Spiral Dynamics: Mastering Values, Leadership and Change* (Malden, MA: Blackwell Inc., 1996); Beck, Don E., "The Search for Cohesion in the Age of Fragmentation," (article written for the 1999 State of the World Forum);

Beck, Don and Linscott, Graham, *The Crucible: Forging South Africa's Future* (Denton, TX: New Paradigm Press, 1991). Richard Dawkins quote from Dawkins, Richard, *The Selfish Gene* (Oxford University Press, 1989), taken from the website, [www.unblinkingeye.com](http://www.unblinkingeye.com); Clare Graves quotes from Graves, Clare, "Human Nature Prepares for a Momentous Leap," *The Futurist* (1974); Ray Kurzweil quote taken from the website, [www.edge.org](http://www.edge.org); Elisabet Sahtouris quote as told to WIE editor, Carter Phipps, Spring, 2002.